

CONTENTS

- シリーズ この人に聞く 第19回  
2-3 玉置太郎さん  
移民・難民の子ども支援  
ボランティア歴6年
- 4.1 第41回ユニセフハンド・イン・ハンド
- 4.2 サタボラSDGS勉強会 中間報告その2  
エシカル消費について考える  
活動紹介 No.31
- 5 キャラクター“ユニちゃん”を語る
- 7 活動日誌（11月～1月）



Minamiこども教室で学ぶ、中国にルーツをもつ小学生。真剣な表情でボランティアの説明を聞き、テスト勉強に取り組んでいる。(撮影：前田美代)



1983年堺市生まれ  
朝日新聞大阪社会部記者

## 玉置 太郎さん

学生時代、バックパッカー旅行でアジアや中東を回り、「国境を越えて生きる人びと」への関心が芽生えた。

# 移民・難民の子ども支援 ボランティア歴6年

大阪にあるMinamiこども教室は、外国ルーツの子どもたちを対象に勉強のサポートをする場だ。毎週火曜日の夕方、さまざまな年齢の子どもたちがやって来る。玉置さんはここで取材をしつつ、ボランティアとしておもに中高生の勉強をみてきた。2017年春からは2年間新聞社を休職し、イギリスに留学。ロンドン大学で移民政策を学んだ。(p.6に関連記事あり)

## ボランティアはギブ&テイク

——外国人が多い地域のなかでも、大阪ミナミはかなり特殊だそうですね。

日系ブラジル人などの場合、工場で働き、両親がいて、生活が安定しているケースが多い。ところがミナミは繁華街で働く人が集まっているところ。母子家庭も多く、飲食関係やホテルの清掃といった仕事に就いている。生活に余裕がなく、時間も不安定、生活保護を受けている家庭もある<sup>1)</sup>。

——家庭では何に困っていますか？

まず言葉の壁。役所に行っても、何を言ったらいいのかわからない。たらい回しにされてしまう。経済的に苦しく、文化の違うなかで、育児など生活全般の弱い部分が凝縮しています。

——Minamiこども教室の子どもたちは、日本語も不自由してないように見えます。

子どもは比較的早くしゃべれるようになりますが、日常会話と教科につながる言語というのは別で、高学年に進むと抽象的な言語も必要になってくる。母語がどっちつかずになっているケースもあり、ダブルリミテッド<sup>2)</sup>と言われますが、しゃべれているけど教科につなげられない、学習の遅れが目立ちます。

——教室ではどんな指導を？

言語と教科の2通りの指導ですね。来日したての子にはひらがなを一緒にやったりし、日本語はわかるけど教科のことは理解できない、九九で止まっていたりする子にはマンツーマンで学習面の指導をします。

——ボランティアはどこまでサポートできますか？

基本的には教室のなかで勉強を見ることですが、学校に比べたら微々たるものです。ボランティアにもいろんな考え方があって、週1回の2時間にできるだけ勉強させたい、ちょっとでも学習の助けになりたいという人もいますし、子どもたちがホッとできる居場所になればいいと考える人もいます。

しかし、実行委員長の金光敏<sup>キムクワンミン</sup>さんは、電話でお母さんから相談があれば、役所や病院の世話、子どもが夜中にいなくなったとか、そんなことにも応じて、かなりプライベートなところまで支援しています。自分がやると決めているので、熱意が違う。われわれボランティアはとてそそこまで担えない。

——もどかしさを感じませんか？

矛盾も感じますが、まずは自分にできる範囲でやるしかない。僕は子どもになにをしてあげられるかを考えるより、ボランティアを介して生まれるコミュニティーに意味があると思うようになりました。ボランティアは何かをしてあげているようで、教えてもらい、貴重な社会体験をさせてもらっている、ギブ&テイクの関係。Minamiのボランティアも子どもと遊び、ほかのボランティアと一緒にいることで、生きていて、実感を得ているのではないかと。決して一方的にギブしている状況ではないと思う。

## マイノリティーの人びとへのまなざし

——日本では移民と言わず、あくまでも外国人だと。

移民という言い方は日本ではまったく流布していません。外国人と言ったときに、外国の国籍者だけを対象にすることになり、日本国籍を持っているけど外国で育つ子どもは抜け落ちてしまう。そういうフィリピンルーツの子がたくさんいます。国籍と母語、住んでいる場所がねじれた状態が今かなり起きている。「外国にルーツをもつ子ども」という言い方が、実態にふさわしい。

——ロンドン大学で学んだ、移民に関する多様な視点とは？

日本社会にいと、移民というのは「来る者、であって、受け入れてあげるか否か、の二択しかない感じになります。しかし、彼らも人間であると考えてみると、そもそもなぜ移動することを選んだのか、家族はなぜそういう選び方をしたのか、国境を越えることでどんな影響を受けるのか、送り出した側の社会はどう変化するのか、など、国や社会の境界を越える移動に付随しているいろんなことが起こっている。まずそれを考えようというのが、広い視点としてありました。

### —— 国境を越える移動は子どもにどんな影響が？

子どもが移民先の社会に入ってゆくとき、見えない境界線（バウンダリー）があると言われます。この境界線がはっきりしている社会ほど、子どもたちは越えた側の社会に同化するのかわからないのか、二択を迫られます。境界線とは、多数派の人種や言語、慣習など社会を構成する要素で、日本は境界線がくっきりしている社会です。一方、境界線がぼやけた社会は多様性を認め、いろんな人がいることで成り立っていると皆が認識している。子どもたちは境界線の両側に足を着け、両方のアイデンティティーを持ちながら暮らすことができる。地元の言葉も話せるけど母語も堂々と言え、見た目が違って自信をもってやっていける……。私は、そういう社会が理想的だと考えています。

### —— 日本は境界線がくっきりしている社会。

日本という国は、同化するのかドロップアウトするのか迫られる社会だと思います。Minami教室の子どもたちも、高校に行く段階になると、まず日本語が不得手だと受験で壁にぶち当たる。いわゆる「普通の日本人」がマジョリティー（多数派）の学校にいれば、見た目が違うことを実感させられる。見た目や言葉の違いを否定的に扱われることで、本人は自信や自尊心を失い、社会の周縁へと外れていってしまうこともある。

### —— つらいですね。

マジョリティーと違うことを突き付けられる社会は、すごくつらいと思う。日本にいてはなかなか気づかない。外国に行ってマイノリティー（少数派）になって、初めて気づく。頭で考えるだけでは、分からないことです。

### —— 日本でも住民に分断は起こっているのでしょうか。

今、ミナミの島之内に住んでいますが、町を歩いていたら外国人しかいないような状況で、古い飲食店の主人は外国人ばかりになると心配します。交わっているようで、交わっていない現状も感じますね。元からいた住民にすれば、言葉は分からないし、面倒くさい、生活習慣も違うから嫌だと思う。それは誰の心にも

あるもので、なにか差し迫った状況になると反感や嫌悪が頭をもたげてくる。そういうものは乗り越えて当たり前という前提でいくと、本当の最前線で暮らしている人には伝わりません。上っ面の言葉で「差別はだめだ」というだけでは届かない。人間の感情というのはいっと複雑です。

ややこしいことも多いけど、違う文化だからいい、いろんな人がおるからいいんだと、個人のなかでせめぎ合わせる認識が必要なのではないか。

### —— 日本人は文化の違う人を敬遠しがちです。

私はロンドンで、黄色人種だし英語も下手で、冷たくされることもありました。けれど、向こうでも難民の子どもも支援ボランティアをするなかで、「タロウ」という一人の人格として扱ってもらい、その経験があったからロンドンを自分の町と思うことができた。今エスニック・マイノリティーとして暮らしている人たちも、自分を認めてくれるつながりがあれば、気持ちが違ってくる。受け入れる側にも出会いを面白いと思う余裕があれば、相手に伝わる。そういう関係が社会全体に醸し出されたいと思っています。

### —— ボランティアも集うことに意味がある。

普通だったら出会わないはずの人と出会う接点、それがボランティア活動の優れたところ。私がやっていることは、ボランティアの意味としてすごく小さいけど、やらないよりはまし。面白いし、自分の価値観が変わっていくこともある。多少は人のためになる。会社と家庭以外にもう一つコミュニティがあるのはいい。だから、そんな感覚であまり肩肘はらずに、どこかに足場を作ろうと思っても、人生損はしないんじゃないでしょうか。

#### 1) 大阪市内に在留する外国人の国籍（2018 年末）

総数 137,467 人 市の人口に占める比率 5.06%。大阪市内は多住外国籍者の上位をアジアが占めている（韓国朝鮮、中国、ベトナム、フィリピン、ネパールなど）。東海地方や北関東地方ではブラジル籍者が集住しているが、大阪市内は南米出身が極めて少ない。（金光敏著『大阪ミナミの子どもたち』より）

#### 2) ダブルリミテッド

2カ国語が多少、あるいはある程度話したり使ったりすることができるが、年齢相応のレベルに達していない状態。

（近藤敦子）



フィリピンにルーツをもつ小学生の少女は、学校の宿題をしている。教室では一対一の学習が基本で、ボランティアの「よくできたね」「がんばったね」といった励ましの言葉がとても重要だ。（撮影：前田美代）